
cool*sweet

ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

cool*sweet

【Nコード】

N3070L

【作者名】

ましろ

【あらすじ】

来栖川唯子

『氷の女』というあだ名を持つ彼女はその名の通り、冷静というか感情をあまり見せない

俺、青葉悠はそんな彼女に惚れていた

ようやく同じクラスになり、運良く席まで隣ときた

これはチャンス、と思っていた矢先、俺は誰かから校舎裏に呼び出され……

プロローグ

4月初頭

世間では、始業式と言われるその日

俺、青葉悠は高校生活二回目の始業式に向かっていた

道路は俺と同じ高校の奴らが歩いてた

少し探してみるが、どうにも俺の友人たちは朝練とやらのせいでいないようだった

まあ、春の暖かい日差しの下を一人歩くのは悪くない……

余裕もあるし、と俺はいつもよりゆっくり歩みを進めていた

私立葵坂学園、俺の通う高校だ

その桜並木を抜け、俺は新しいクラスが張り出されている掲示板に向かう

(今日は早く終わるし、色々必要なもんを揃えに行くか)

そんな事を思いつつ歩いていると

「おーい、悠！」

後ろから俺を呼び止める声が聞こえた

振り返るとそこには友人の一人、里見蓮がいた

こいつは運動系の部活に所属していて、この学校では珍しくそこそこの成績も納めているらしい

まあ、俺みたいなもやしとは体のつくりからきつと違うんだろう

「おー、久しぶりだな、蓮」

でかい体の通り、でかい声だ

「二週間ぶりくらいだな、お前掲示板に行こうとしてたろ？」
ああ、と相槌を打つ

「朝練が始まる前に見てきた。どうやら、同じクラスみたいだぜ
ははっ、残念だったな！」

そう言つて、俺のカバンを引っ張り引きずる

他にもどのクラスか見たい人はいたんだが、まあいいか…
行けば分かることだしな

「教室は3階の隅みただげ、つたくめんどーだよな！」

「お前みたいに部活に入つてりやまだましだろ…、俺には階段がっ
らいよ」

本当に、毎日一階からここまで上がるのかと思うとうんざりだ
と、そんな事を考えている間に新しいクラスについた

ドアを開け、座席表が書いてある黒板を見る

「見慣れない筆跡だが女の人みたいだな、新任か!？」

黒板を見てはしゃいでいる蓮を放置して俺は自分の席を探していた

「あ…」

俺の席は窓側最後尾、最上の席だったのだが
それ以上に

「おっ、お前、噂の氷の女の隣のとは…。なかなか大変だな！」

蓮が何か楽しそうにそう言った

俺の隣には、『来栖川唯子』という文字

その席を見ると、無表情に外を見ている女の子がいた

氷の女、来栖川唯子

彼女がそう言われる理由はいくつかある

第一に、彼女の感情表現の希薄さがあげられるだろう

笑っている顔はおろか、驚いている顔すら見たことがない
常に無表情、常に無関心
口調も固く、それがさらにその『氷』具合を引き立てていた

さらにもう一つ

氷のように洗練された美しさがそれだろう

薄い色をした流れるような黒髪

透き通るような白い肌

高身長でスレンダーな体型はまるでモデルのようで…

と、俺がなぜそこまで彼女を観察しているのか

理由は簡単だ

俺は彼女に恋をしていた

どうせ、片思いだろうが

だけど、せっかく隣になったのだ

少しくらい仲良くなりたいな…と、下心を覚えてしまうのは

仕方ないことじゃないか？

俺は自分の席に向かったそして

「おはよう、来栖川さん。これからよろしく」

俺が、なんとかそこまで言うと、

彼女はその存在にはじめて気がついたという様子で

「よろしく、青葉くん」

と返してくれた

(あれ・・・？少しだけ、驚いていた)

となりの人間が来れば、多少は感情を抱くものだろうが、

滅多に見えないといわれた彼女の無表情以外の顔に少しだけ新鮮さを感じた

俺はなんとかさらなる会話を重ねようとしたが、そこで異様なテン

シヨンをした新任教師が入ってきたせいで打ち切られてしまったのだ

滞りなく1日は過ぎ去り、俺は朝以外何も会話ができなかったことを悔やみながら、昇降口から帰ろうとしていた

夕焼けに染まる昇降口には誰もおらず

外からはかすかに運動部の掛け声が聞こえた

俺は、自分の番号の靴箱から自分の靴を取り出し……

「ん……？」

その中に紙切れが一枚

（校舎裏で待つ）

内容だけみればまんま果たし合いの申し込みだったのだが

「女の子の文字だな……」

それは流麗な筆跡で、到底男が書いたようには見えなかった

（なんだろうな……、告白とかでも困るんだが……）

俺には既に想い人がいるわけ

と、さすがに妄想しすぎか……

いやだけど、校舎裏への呼び出しなんてそれくらいしか……

（いくか……）

どうせ行けば分かるのだ

俺は靴を履き替え、校舎裏に向かった

「なっ………!!」

校舎裏についた俺が見たのは、目を閉じて立っている唯子さんの姿だった

（まさか、これは……）

思わず手紙に目を落とす

校舎裏への呼び出しはそれくらいしか……

とか考えたけど！

（いや、そんなうまい話が……）

「おや、青葉君、来ていたのか」

「っ…!?!」
突然呼びかけられ顔をあげると、さっきは遠かった唯子さんが目の前に立っていた
「なぜそんなに驚くんだ、キミを呼び出したのは私なんだが声くらいかけるさ」
そう言うのと彼女は俺を校舎裏の、さらに死角になっているせまいスペースに連れ込んだ

(こんなに喋っている唯子さん…、初めて見るなあ)
まだ事務的な応答しかしてないけど

「今日はキミに話があるんだ」
俺の事をじーっと見つめ、彼女はゆっくりそう言った
なんだかよくわからない雰囲気にいるんな意味でドキドキしつつ、俺は頷いた

そこで彼女は一度目を閉じ、深呼吸をして
「私と付き合え」

「えっ…」
今、彼女は何と言ったのだろう
いや、何か命令形だったことを抜きにして…えっ
「いや、だから…、ああ…」
もしかして、言い方を間違えたか。すまない、どうにも不慣れなんだ」
彼女はくるりと反転し、なにやら考え始めた

(…って、俺は告白されたのか!?)
まさかの事態、いや最初は予感はしていたが
妄想のレベルだったし、実際告白されるなんて夢にも…

「よし」
いつの間にか彼女はこちらに向き直っていた
そして

「私と付き合ってくれませんか？」

透き通るような白い肌に、少しの朱みをつけながら

そう言う彼女はとてつもなく魅力的で

そんな状況で言われた俺は即断即決

そもそも、断るつもりなどなかったわけだが

こうして色んな段階をすっ飛ばして俺たちの春は始まったのだった

第1話 新しい日常と知らなかった彼女の一面

夕暮れの帰り道

普段なら独り寂しく帰っているはずの道

でも、今日は隣に人が居た

さつき、俺と恋人という関係になっただけ、来栖川唯子さん

正直、今でも信じられない

ぼーっと、唯子さんを見ていた俺に

「そんなにぼーっとしてどうした？」

思わず何も無いよ、と言いつけかけたが

せつかくだから聞きたかった事を聞いてみた

「どうして、俺なんかを好きになっただけ？」

唯子さんはしばらく考えていたが

「うーん……、どうしてなんだろうな？」

と返してきた

「気が付いたら、キミの事ばかりを考えていたんだ。

廊下ですれ違う時も何故か目が勝手にキミの方に行ってしまう」

一目ぼれ、という奴なのかな

そう、冷静に言った

「でも、俺そんなに顔も何もよくないのに、

一目ぼれなんかされる理由なんてないんじゃない？」

「いや、理由も何も、それが無いから一目ぼれって言うんじゃない

のか」

相変わらず、口調は淡々としていた

それでも、俺は彼女のストレートな告白がかなりキていた

「キミは？」

「えっ……？」

「私が言ったのだから、青葉君も言うのは当然じゃないか？」
なるほど、確かに。

俺が唯子さんを好きになった理由…

うまく言葉にできないがそれは多分

「かつこよさ…」

「かつこ、よさ…?」

よくわからない、と言いたげな顔で俺を見る

「来栖川さんって、いつも冷静で、なんだかかつこいいなって思っ
てたから。」

多分、そこに惚れたのかな…」

俺がそう言うと、来栖川さんの顔はまるでリトマス紙が赤くなるよ
うに一瞬で朱に染まった

「あ、ああ……、そう、なのか……」

顔をそらしながら、そう言う

「くらくらする……」

「大丈夫!？」

顔を抑えながらそう言う唯子さんだが

「いや、その……これは、あれだ。心に来るものがあるな」

体を持ち直し、顔の色も普通にもどった唯子さんがそう言った

「そう…なの?」

「ああ、ここが公道でよかった。人目につかない場所だったら感情
が爆発していたかもしれない」

最後の方は、小声になりながらそういう唯子さんがちょっとかわい
らしかった

俺は普段と違う来栖川さんの表情や言動に若干の新鮮さを感じていた

「意外だなあ

来栖川さんって逆にそういうのも軽くあしらうようなイメージだっ
た」

俺がそう言つと、

キミはどこまで私を冷たい人間だと思つてゐるんだ、と返した上で
「好いてゐる人より近づきたいと思つるのは普通だろう？」

私はそれが人一倍強いだけだ

そう考えれば、君の方が遥かに冷静だよ」

とそう平然と言つた

「でも、今日は色々な唯子さんが見れて、よかつたよ。眼福つて奴
かな」

唯子さんはそうか、と言つと

こつちに勢いよく向き直ると手を差し出した

「私の恥ずかしい色々な姿を見たり、…まあ他にも色々した罰だ。

私と手を繋げ」

顔を少しだけ朱く染め、そう言つ唯子さんはとてつもなくかわいく
て、俺は考えるまでもなく

「喜んで」

と言い指を絡めた

一瞬、驚いたのが絡んだ指から伝わつたの

「青葉君」

「何？」

「これから…、よろしく頼む」

「うん、こちらこそよろしく」

夕暮れの町は、美しい夜の訪れを告げていた

第2話 それぞれの時間

青葉君と別れて十分後くらい

私は家に帰り着いていた

「ただいま」

私が玄関のドアを開けると、奥から騒がしい音を立てながらお母さんが飛び出して来た

「おかえりー、唯ちゃん」

来栖川天音、それが私のお母さんの名前だ

外見は私より少し小さく、童顔で、声もどこかそんな感じで、なんでも大きさを

だけど、一緒にいるとどこか落ち着く

それがこの人の仕事にとって天賦の才なのだ、と前に家に来ていた同僚の人が言っていた

私にとつてもとてもいいお母さんではあるのだが

自分の親に対して言うのもどうかと思うが、この人は若すぎる

「どーだった？新しいクラスはー？」

「特に…、普通だな」

クラスに関しては特に何もなかった

全体で言えば、担任が異様に騒がしかったことくらいだろうあれじゃ、行事のたびにすごいことになりそうだ

「そーなんだあ、特に悪くなくてよかったねー。ところでー」

「何？」

「いつも無表情な唯ちゃんがそんなにニコニコしてるのはなんで？」

「……？」

私はその時初めて自分が笑みを浮かべていた事に気が付いた

「何か良いことがあったんでしょー、それもとびきり良いことが！」

「うん…、まあ」

そう言つと、お母さんは目をキラキラさせて

「聞きたいなー、もうすぐご飯ができるから、その時に聞くよ！早く着替えて降りて来てねー」

そう言つとお母さんはドタバタと奥に引っ込んでしまった

私は部屋に繋がる階段を上がりながら

（私が、彼氏が出来たって言ったらどんな顔するんだろ…。喜ぶかな、怒るなんてことはないと思う……けど）

同時刻、青葉家

「ただいまー」

どうせ返事が無いことは知っているが帰宅の挨拶をしておいた昔、ただいまというだけで家に人がいると思ひ泥棒が狙わなくなるのかなんとか

聞いた気がする、別に関係ないけど

昔からの習慣なのだから仕方ない

やはり、返事がないということは、二人の姉はまだ帰宅していないらしい

（夕飯、作るか）

帰宅が俺より遅い場合、姉が料理していたら夕飯はかなり遅くなる親が二人とも出払っている我が家の夕食作りは多くの場合俺の役割となるのだ

カバンを放り投げ、制服を脱ぐ。

（今日は…焼きうどんにしよう）

メニューを決めて調理に取りかかった

時計の針が8時をさした少し後

ちょうど用意が終わった時、玄関から声が聞こえた

「ただいまー」

すぐに居間の扉が開き

「お、ちよつと夕飯ができたようだな」

と言う、長身で眼鏡をかけた

いかにも堅そうないメージの姉その1、名前は梨花

「んー、お腹すいてたのー。悠ちゃんナイスタイミング！」

親指を立てながら、

続けたのは俺より小さい天真爛漫という言葉がぴったりの姉その2、

名前は桃花

ちなみに二卵生の双子だ

「いただきます」

三人で食卓を囲む

最初に口を開いたのは梨花姉だった

「どうだった、始業式は？」

「いや、別に…悪くなかったけど」

俺は今日あった衝撃的な出来事を悟られないように冷静に答えたりもりだったが

「ふむ…」

梨花姉は俺をじっと見据える

「悠、お前何か隠しているな」

「えっ……、隠してなんか!？」

俺がそう言うが

「悠ちゃん、顔がうそ付いてる顔だよー？」

「!？」

ジト目の桃花姉がそう言った

「大体、悠は緊張するとまばたきが増え、目が明後日のほつを向く癖があるからすぐにわかる」

と静かに言った

(やっぱり無理か)

俺は今更痛感した

相手が悪かったのだ

この二人、外見も中身も正反対だがやっていることは同じ、心療内科の医師。

メンタルケアを専門にし、毎日人の様子から変調を感じたり内面を見ているのだから…、そんな相手に故意に隠すなんて無理な話だ

「実は…」

「実は…、私彼氏ができた」

夕食の席、私の突然の告白にお母さんは一瞬驚いた様子を見せたけど「よかったねー、唯ちゃんにも春が来たんだー」と喜んでくれた

「まるで私の今までが氷河期みたいに言うんだ……」

しかし、お母さんは私のツッコみを鮮やかにスルーし

「相手は、どんな人なの？」

と聞いてくる

「うーん…、私も気が付いたら好きだったから、まだよくわからない、けど…いい人だ、優しい人」

お母さんは、私が言葉を切るたびにうんうんと首を振り

「そっかー、唯ちゃんがそう言うなら本当だね。唯ちゃん、人を見る目は厳しいもの」

「そ、そうか？」

「うん、激辛だよー」

そうだったのか……、気をつけないと

「ところで、どう？その子、今週末にうちに連れてこない？」

お母さんはカレンダーに丸をつけながらそう言う

「いきなり招待って……、驚くぞ」

「だってー早く見たいんだもん」

見たいんだもんって…、私も母親になればその気持ちもわかるのかな…

「わかった、聞いてみるけど……」

急だけど、大丈夫かな…

「よろしくね！……お父さんにも報告しなくちゃね！」

ああ、そうだった……

「喜んでくれるか……？」

お父さんは、きっと反対しそうな気がした

私がそう言つと

「大丈夫、お父さんはああ見えて唯ちゃんの事大好きだったから絶対祝福してくれるよ！」

「うん、じゃあ後で言ってくる」

その後は、いつも通りの時間が続いた

「俺、彼女が出来たんだ」

俺がそう告げると姉さんたちは、

「悠……、幻覚でも見たか？」

「悠ちゃん、後でゆっくりお話ししましょう」

2人して哀れむような目をしながら言つた

「幻覚じゃねーってーの！告白されたんだよ！」

俺がそう言い返すと

「告白されただと……信じられん」

梨花姉はこの世の終わりを見たような顔をしていた

「でも、見てみたいいなー悠ちゃんの彼女さん」

と桃花姉が言つた

「確かにな。桃花、いつなら休みだ？」

「私は……、日曜日なら休みだよ」

「私も日曜日は休みだ。よし……」

そう言つと梨花姉は俺に

「日曜日、つれてこい、彼女を」

有無を言わせない口調でそう言つた

「はあ？」

「夕食会だ、早めに交流を持った方がいいしな」

「でも、相手の都合が…」

隣でうなづいている桃花姉もなんか言ったらどうなんだ。

しかし、梨花姉は

「とりあえず月曜日予定で聞いてこい、無理なら日にちを確定させる。有給を使う」

とまくしたてた

「わ、わかったよ」

俺は迫力に押されOKしてしまった

「楽しみー。梨花ちゃん、日曜日は買い物に行って頑張って料理しよーね!」

「料理は任せた、私は苦手だからな」

などと、月曜日について語り出した姉を前に俺のテンションはがangan急降下していくのだった

第3話 いつもどおりの日常と変わった一部

けたたましい音を上げる目覚ましを叩き、時間を確認する

「いつもどおりだな…」

俺はまだベッドに張り付きたがる体を無理やりたたき起こす

カーテンをあけつつ立ち上がり着替えを済ませる

階下に降りてキッチンへ

バスケットの中に大量に入っている菓子パンを2つ掴み、カバンの中に押し込んだ

朝は全員用意する時間がないという理由で、家には大量のパンが常備されていた

教科書の大半を昨日学校に置いてきた俺のカバンには、それとペンケースなど最低限の物しか入っていなかった

そんな軽いカバンを肩に掛け、俺は家を出ることにした

(今日も…、やっぱり人はいねーな)

俺の通う学校は私立だから知らないが妙に部活はしっかりしている。大抵の部活に朝練があり、それに参加する奴もまた多い

まあ、それでもあんまり成績がよくないのが哀しいところだろう

故に俺の朝の登校は一人が基本なんだが……

「ん…?」

「おや…」

俺は通りに入る曲がり角に誰かが立っている事に気がついた

どうやら、相手も同時に気がついたみたいで

「おはよう、青葉君」

唯子さんがそこには居た

突然の事に思わず無言になる俺に対し

「どうした?」

と問いかける

ようやく思考が現実を追いついた俺は

「え…あ、いや…。驚いたんだよ」

と返した

唯子さんは、何で、といった顔をしたが

「ああ、何も言わずにここに来たからか？」

「うん…、それに来栖川さんってこういう事、しそうじゃなかったから」

そう言つと、彼女は

「いや、私は彼女は彼氏を迎えに行くものだ、と友人から教わったからな

当たり前かと思つていた」

当たり前、なのだろうか

「俺もよく知らないけど、来てくれるのはうれしいかな
毎日一人で登校するのは暇だし」

そう返すと

「じゃあ、これからは暇じゃなくなるといふ事だな」

私は毎日でも来るぞ、そう言つてくれた

その後ようやく話したかった週末の食事会の事を話した

すると唯子さんからも全く同じ事を言われ、お互いに土日で訪問する事で決まった

しかし……

(こんなに早く親と会うなんて…)

予想外の展開に正直戸惑いは隠せなかった

後は、他愛もない話をして、学校に着いて二人して教室に入った

何か思われるかと思つたが、まさか唯子さんと俺がそんな関係とは誰も思われなかったみたいだ

特に変な視線も送られず俺たちは着席した

蓮はいつも通りチャイムぎりぎりに飛び込み

ちなみに奴は俺の3つ前

HRが始まり、今日もテンションが高い新任（蓮の予想通り女性）が「今日から授業だ気合いれてこー、私も初めてだけど！」

とよくわからない激励を送り、その初めての授業は

1時間目に俺たちになのに、去って行ったりして。

そんなこんなで

まあまあ普通な午前が終わった

昼休み、飯時だ

俺にとって現在唯一のクラス内の友人である蓮は

いつの間にかどこかへ消え去ったようだ

多分購買だろう

俺は隣の来栖川さんを見た

（いつもは昼をどう過ごすんだろう……）

俺はそこまでまだ知らない

大抵の生徒は教室で友人同士固まって食べるんだろうが……

唯子さん、クラスに友達いるのかな……

近寄りがたいオーラが出ている唯子さんには近づく人が少ないよう

な……

「青葉君」

「ん？」

ちょうど唯子さんが声をかけてきた

「もし昼に誰かと過ごす予定がなければ、ちょっと付き合わないか？」

「あ、ああ……。構わないよ」

そう言つと、彼女は小さなカバンを持って俺を促し、教室から出た

「どこにいくんだ？」

「友達の所だ」

「友達…」

なるほど…、クラス内に友人がいなくても外にはいるんだな

「唯子さん」

「なんだ？」

「クラスに友達、いないの？」

そんなことはない、と返し

「分かりやすく言うと、友達の友達は他人ということだ。

それに、弁当はここで食べると決めているんだ」

いつの間にか、校舎の隅に来ていた

「ここは……」

「図書室だ」

そして、と唯子さんは言い

「しかし、中は飲食禁止、つまり…」

そう言うと、彼女はポケットからビニールシートを取り出し廊下に敷いた

「変わってるね…」

思わず言ってしまった

「確かにな

ここに来るのはクラス内に昼を過ごす人がいない人

ただ、勘違いしないでほしい

別にみんなが孤独だと言う訳じゃない

友人はみんなちゃんといる、ようするに

去年にクラス運がなかっただけ。

そして、他のクラスの友人の友人は他人だったんだよ」

来栖川さんはそう言って苦笑した

「一人は、今日も来るってメールがあつたんだが…」

そう言つて携帯を取り出す

…後でメアド聞いておこう

そして図ったかのように、どこからか足音が聞こえた
そして

「唯子ー！」

と声が聞こえた

その声の方を見ると小さな女の子が走っていた

一見すると下級生だが…

彼女はこちらに走ってくる、肩を上下させつつ

「さあ、今日も楽しいお昼ご飯だ…、ってあれ？」

と俺を見る

「二人とも、…紹介しよう」

来栖川さんがそう言い、小さな子を示して

「彼女は榊原杏子。」

私の中学時代からの同級生、それで…」

同級生！？同じ年なのか…

俺は衝撃を受けたが紹介は続き、今度は俺を示して

「杏子、この人は青葉悠。私の恋人」

そう言うと、杏子は目を光らせ

「おー、この人が唯子の彼氏さんですかあ…。へえー」

全身をじーっと見つめられ、若干引き気味になる俺に

「さえないですね」

「ほっとけ」

いきなり失礼な奴だな

「杏子、私の彼氏にさえないは失礼」

「あ、そうでした！」

そういうと、

「よろしくです、青葉君」

と手を差し出す

「ああ、よろしく」

握手とは変わってるな、と思ったが

俺はその手を握りかえした

「これで全員なのか？」

俺がそう聞くと

「まだ…、一人来てない、ただ来るって連絡がなかったから…」

「まああれはほっておいて、食べててもいい気がするけどー」

杏子がそう言い、来栖川さんも同意したため、食べ始める事にした
昨日の事を杏子から根掘り葉掘り聞かれ

相変わらず普通に答える唯子さんと

それを聞き恥ずかしさで悶える俺の姿があった

(なんで発言を一字一句覚えてるんだ…)

精神的に限界が訪れかけたその時、また足音が聞こえた

そして

「うーっす、お二人さん。」

いやー、購買が混んでてさー。

しかも、教室で友達と食べようと思ったたらどっか消えてて、って！

何で悠がここにいるんだよ!？」

俺が振り返るとそこには、蓮が購買の袋を手に立っていた

「その問い、そのまま返すわ」

パン食いなから俺がそう言うのと

「俺は前からここで飯食ってたけど…」

「え、何、お前、友達いねーの？」

「ちげーよ!？お前、友達じゃねーのか!？」

と、ここで杏子が口を挟み

「蓮は私が誘ったんだよー」

と言った

「そ、そうだよ、去年のクラスがどうにも俺には合わなくて、同じ部活の杏子に愚痴ってたら、じゃあ来ればって…」

なるほど

「まあ座れよ」

「あ、ああ……」

とりあえず座らせて、

「お前さ、昨日の朝クラスに入った時に唯子さんの事をまるで噂でしか聞いたことないですみたいな反応したよな」

「ああ、そうだな」

「あれは演技か？」

俺がそういうと、蓮は購買の包みをはがしつつ

「そうだな」

しれっとそう言った

「何でそんな事したんだよ!？」

思わず俺はつつこんでしまった

「いや、だつてよ……」

来栖川が前々からこんな変人を想っている事は聞いてた

お前が来栖川を好きだつてーのも勘だつたが想像はついた

なら、俺はあそこでどちらに対しても深く関わらないでおくのが一

番かなーと

と答える蓮に

「別に、そんなに気を使わなくてもよかつたんだが」

と来栖川さんが言った

「まあ、来栖川はそう言うが例えば『来栖川さんはかっこいいな』

とか言つてた奴の目の前で俺が陽気に話しかけたらイメージが瓦解するだろ」

言っていた奴とは無論、俺の事だ

「で、悠がいるって事はそういう事か」

「……そういう事だな」

来栖川さんは静かに答えた

「そうかー。おめでとうさん。ま、悠はつまんねー奴だけど多目に
見てやってくれ」

「つまらなくはないぞ、なかなか優しいしな……」

来栖川さんがそう言い蓮はジト目で俺を見据える

「ったく、いきなり彼女もちになりやがってよー」

そう言うときささず

「こんな事言ってるけど、里見君も助けてくれた」

「そうそう！」

『悠はああ見えて押しに弱いからガンガン詰め寄ればすぐだ』

とか言つてアドバイスしてました！」

と二人が言つた

「おいっ！榊原、やめる！？」

焦って止めるがもう遅い

「なあ、蓮……」

「なんだー？」

「とりあえず、色々あつたみたいでありがとつな」

俺がそう言つた途端に顔を逸らし

「いいってこつた……」

……俺も彼女ほしい……」

「紹介しようか！」

「うっせー！お前の紹介はいらん！」

こんな感じで……、少し変わった場所での、騒がしい昼は過ぎていっ
たのだつた

とりあえず、学校は問題ないみたいだけど、休日を考えると不安で
いっぱいだつた……

第4話 楽しい時間

土曜日の午後6時10分前

俺は、家から少し離れた交差点でしきりに腕時計を確認していた
なんだかんだで、あつと言つ間に平日は終わりを告げてしまった
土曜日、俺が唯子さんの家に行く日だ

朝から服とか、格好に相当悩んだ

でも俺があまりにも堅い格好なんかしても、無駄に背伸びをしてい
るようにしか見えない

そう思い普段通りの服を着ていくことにして、今この場で待ってい
るわけだ

「そろそろか…、つと」

俺は視線の先に唯子さんの姿を捉えた

彼女も同時に気がついたようで小走りで近づいてくる

「待った？」

呼吸を落ち着かせながら彼女は聞いた

「そんなに待ってないよ」

そう返すと、安心したようで

「そう。なら、よかった……」

とかすかに笑った

「それじゃ、行こうか」

と言つがなんだか下を向いて歩き出さない

何か抗い難い何かと戦うような…

「青葉君」

「どつしたんだ？」

彼女はどつやら戦いに敗北したようで

「はぐれると困るから…、手を繋ぐのはどつだろつ」

そう言い、左手を差し出す

「それはいい考えだね」
と、俺は彼女の手を取ったのだった

唯子さんの家はいつも俺と別れる場所から案外近かった
「……………ここよ」

彼女が立ち止まったそこは、小さな普通の一軒家だった

「それじゃ、入る？」

「ちよ、ちよつと待て。心を落ち着かせる……………」

深呼吸を始めた俺を見ておかしそうに笑いながら

「大丈夫、そんなに緊張しないで。入ろう」

そう言っただけで彼女はドアを開けた

「連れてきたよ」

玄関に入ると、彼女は奥に向かいそう言った

「居間まで入っただけいいよー、ちよつと用意が終わったからー」
やけに幼い声が返ってくる

「唯子さん」

「何だ？」

「唯子さんって、妹がいるの？」

そう言っただけで、唯子さんは苦笑した

「どうしてそう思うかはわかるけど、まあ入れれば分かるよ」
そう言っただけで、居間の扉を開けた

「いらつしやいませー」

部屋の中には、小柄な女性が立っていた

「はじめまして、青葉悠と言います。えーつと……………」

見た目は十歩譲って同年代、もしくは……………」

とそんなことを考えていたら……………その人は、俺の前まで近づいて

「はじめまして、来栖川天音と申します。娘がお世話になってます
つ

そう言つて、頭を下げたのだった

「改めまして、私たちの素敵な出会いにかんぱーい」

天音さんがそう言い、3つのコップが軽い音を立てた

「お母さん、珍しくアルコールなのね」

唯子さんが楽しそうにそう言つと

「えへー、めでたい席にお酒は必須なんだよー。明日もお仕事だから少しだけだけどねー」

ニコニコしながらそう言つた

楽しい時間は早く過ぎるといふ奴で

気がついたら時計の針は左をさしていた

「あ、もうこんな時間。さすがにお開きね」

「時間は仕方ないねー」

唯子さんと天音さんはそう言つた

「そうですね。今日は楽しかったです。本当に」

俺はそう言い、帰る用意を始めた。

天音さんは、どこかから上着を取り出し、

「青葉君、大通りまで送るよ」

と言つた

「そんな、別にいいですよ。一人で帰れますし」

「まあまあ、ちよつと話をしたいこともあるし」

最後は耳打ちで俺にそう言つと

「じゃ、ちよつと行つてくるねー」

そうして、俺は来栖川家を後にした

夜の道を、天音さんと2人で歩く

街灯があるとはいえ、さすがにこの時間は闇が多かつた

隣を歩く、天音さんはまだ口を開かない

しばらく、俺たちを静寂が包んだが

「青葉君は……」

「はい？」

天音さんはこつちを向くと

「ずばり、唯ちゃんのどこに惚れたの？」

と聞いてきた

最近、こんなことばかり聞かれるのは気のせいではないと思う

「そうですね、俺は唯子さんの全部が好きですけど、

一番好きなのは、あのクールなところだと思います」

そう言っていると、天音さんは再び無言になってしまったが

「私はね、あの子をあんな風にしちゃって後悔していた時期があったの」

と話し始めた

「なんとなく気づいたかもしれないけど、家には父親がいないの。

出かけてるとかそういうのじゃなくて、この世にはいない

あの人死んじゃったのは、まだ唯子が小さなきだった」

本当に、運が悪かったのよ、あの方は

と天音さんは言い

「生活に問題はなかったの。私はありがたい事に独身のときの職場に拾ってもらって

2人で暮らしていくには十分だったから。ただ、逆にそれがまずかったのかな

あの子は自立を強制させられてしまった

小さなときに遊ぶ時間も十分に作って上げられなかった」

「ただ、あの子が中学にあがる頃、私もなんとか仕事と生活を両立できるようになって

あの子にも少しだけ自由な時間を上げることができた」

「ただ、口調があんなでしょう？」

「そうですね……、俺はあの口調嫌いじゃないですけど」

そう言うと、天音さんはくすくすと笑い

「青葉君は結構特殊だと思うわよ。」

でも、本当に感謝してる」

天音さんはそう微笑み

「最近ね、あの子少しだけ変わったのよ
笑って見せるし、驚くし……

本当に、びっくりした

これが愛の為せる奇跡って物かしら」

にやにやしながら、そう言った

「まあ、……本当にこれからもよろしく頼むね、唯子のこと」

俺の手を握り、目を見て天音さんはそう言った

「……はい」

俺は、しっかりとそう返した

しばらくどうしたのかと思っていたら

道路の向こう側から車が走ってきた

俺たちは道路の隅によって避けたが、何故か車は隣に止まった

あれ、この車は……

俺が結論に及ぶ前に車の窓が下に下がり……

「部長、こんな所をほつき歩いてたらまた警察に捕まりますよ
って悠じゃないか」

「ほんとーだー。天音ちゃん、いくらうちの悠ちゃんがかわいいか
らって持ち帰らないでくださいよー」

車の中に乗っていたのは2人の姉だった

「梨花ちゃんに桃花ちゃん。ごめんねー、ちよーつとお話を」

「ちよーつとつてあれ……？悠、今日は彼女の家に行ってたんじゃない
？」

「行ってたけど」

梨花姉はしばらくあごに手を当てて何かを考えていたが

ああ、と納得した表情を見せて

「つまり部長が彼女なのか！」

「ちげーよー！」

この姉は実は馬鹿じゃないのか！

その後の話を簡潔にまとめると

2人は病院からの帰り道に偶然俺を見つけたこと

天音さんは姉さんたちが勤める病院の心療内科のリーダーだということ

がわかった

「そっかー、悠ちゃんの彼女さんは天音ちゃんの娘さんだったんだー」

「俺は今日色々知りすぎてパンクしそうだ」

頭が痛い……

「まあよかったじゃないか。見知らぬ人じゃなくてこっちも気が楽だ」

梨花姉はそういつて笑った。

「とりあえず、明日はその娘さんと呼ぶのねー、楽しみだわー」
そういう桃花姉とは裏腹、少し不安を抱える俺なのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3070/>

cool*sweet

2010年10月28日07時24分発行